

アサヒカメラ

12

PHOTOGRAPHY JOURNAL
ASAHI CAMERA
December 2013
870yen

ダイヤル操作のフルサイズ一眼レフ

ニコンDf鮮烈登場!

生誕100年 植田正治に学ぶ写真
ローパスレスカメラはどう選ぶ?

激突!68機種カメラ採点簿

話題の新機種を実写&徹底解剖

ソニーa7R/a7/ニコンD5300

富士フィルムX-E2 パナソニックLUMIX GM1

[診断室]

シグマ35mm F1.4 DG
HSM / 18~35mm
F1.8 DC HSM

[グラビア]
水越 武
藏 真墨
橋本理恵
薄井一議
染川 明
石塚元太良
布施直樹
J・ケーデルカ
鶴尾倫夫
斎藤康一



植田正治夫妻
(1949)



Showa88／昭和88年

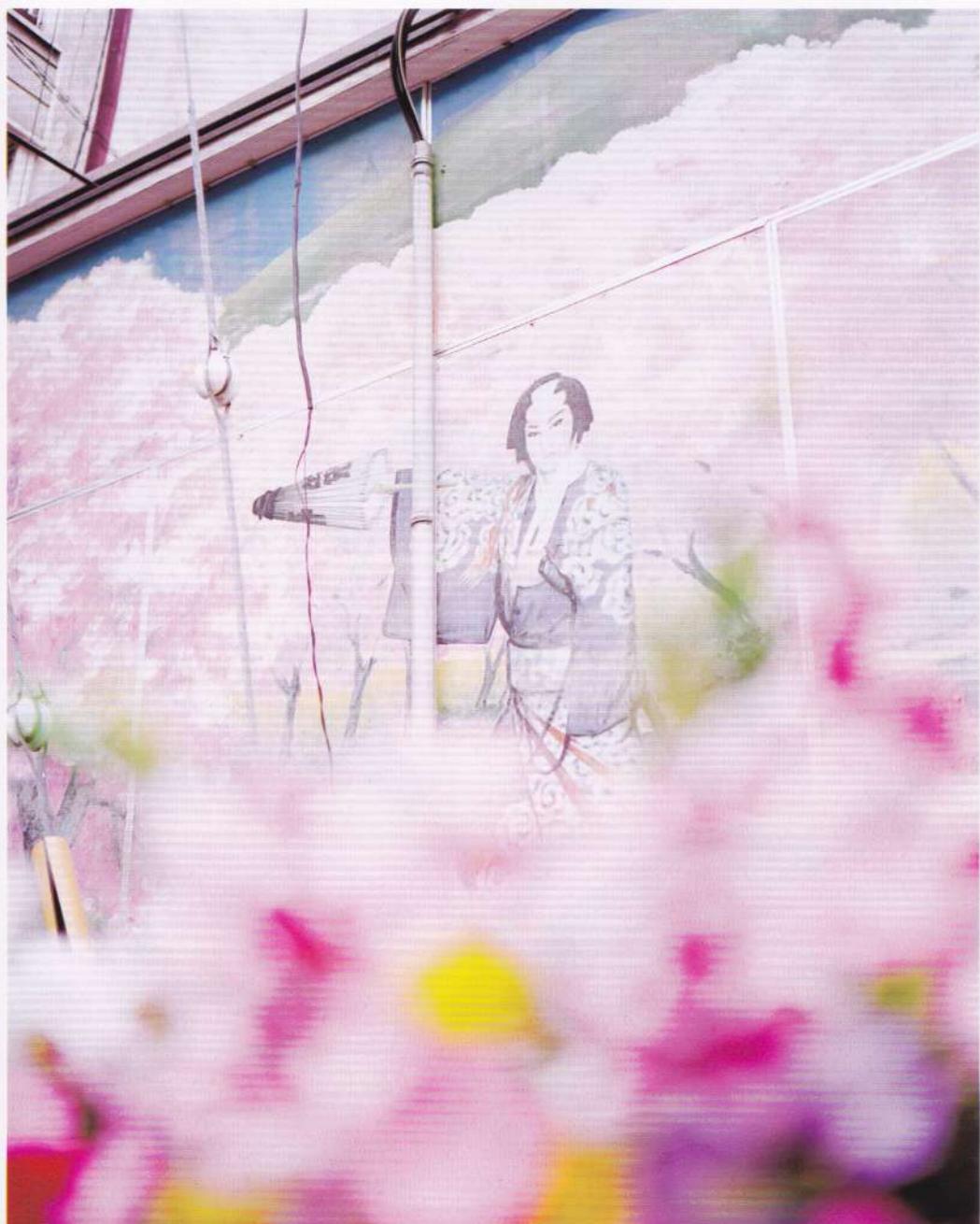
薄井一議

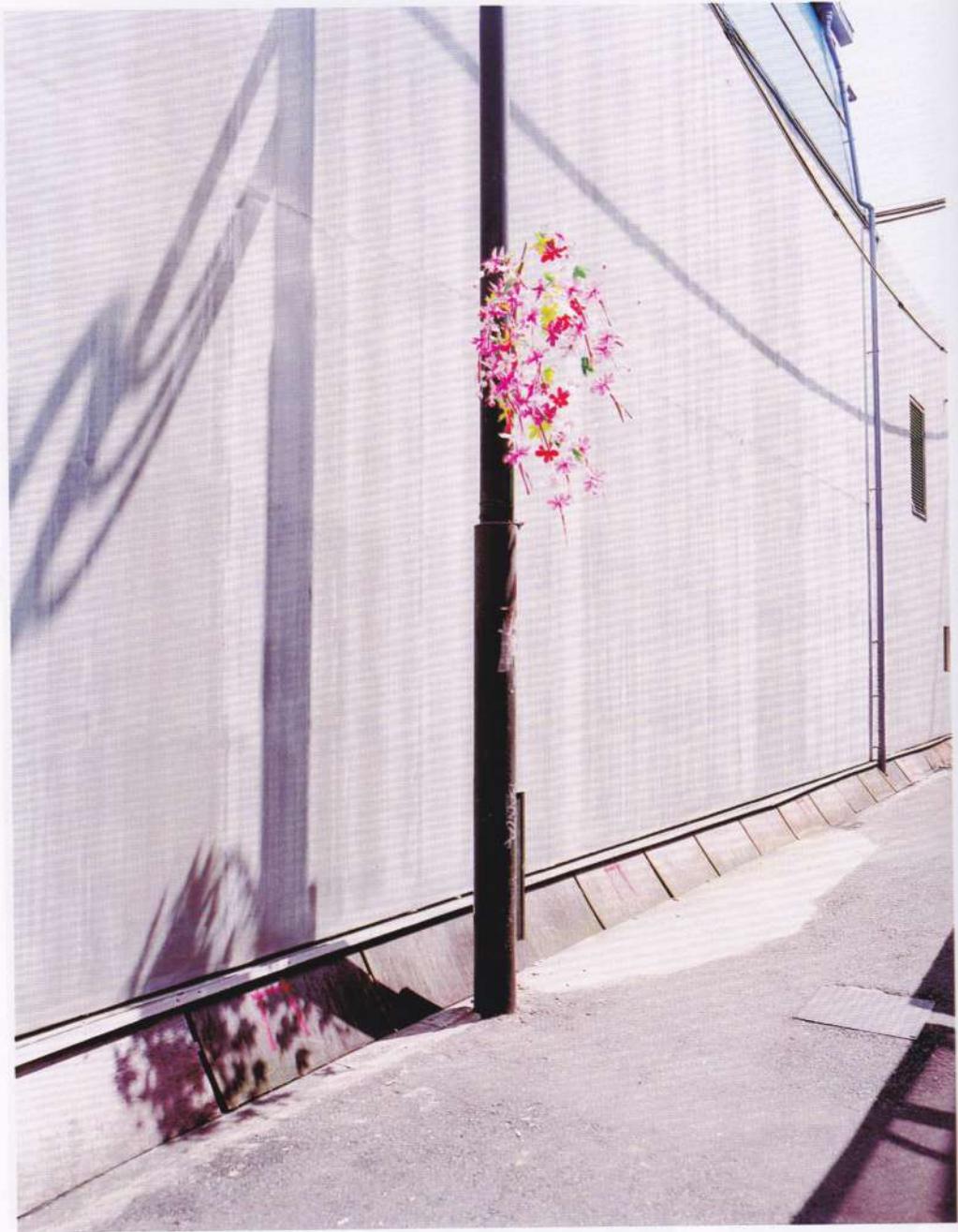
Usui Kazuyoshi



2018年8月号









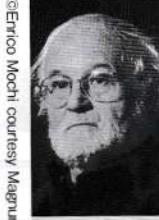
ペンタックス67Ⅱ・105^{mm} F2.4、75^{mm} F4.5・ポートラ400NC

写真集『Showa88／昭和88年』(ZEN FOTO GALLERY)発売中



Washio Michio

鷺尾倫夫



Josef Koudelka

ジョセフ・クーデルカ



Saito Koichi

斎藤康一



Usui Kazuyoshi

薄井一議



Hashimoto Lee

橋本理恵

いろいろのたとえで、家族とは謹んで。私はいつも自分のことに手をはおろか、叔母が私してくれたようなことを自分の姪にできるのかどうかも不明です。なんとも情けない具合ですが、まあそういう時代ということで。

橋本理恵
通り過ぎに口笛を

吹かれたことはあるか

入退院を繰り返した2010年、もう一度写真家としてやろうと決めたとき、東京・池袋の街と人が輝いて見えたという。雑踏で人のパワーを感じ、通りすぎる瞬間にかけてシャッターを切る。お辞儀をして目で合図をするが、嫌がる人はあまりいない。東京を代表する繁華街でありながら埼玉県に近く、地方感があり、住みやすく、撮りやすい街であることを実感した。

そうして高校生や在日外国人、風俗嬢、観光客、主婦など雑多な人びとを夢中で撮りまくり、写真に収めている。憧れはロバート・フランクや荒木経惟、桑原甲子雄のスナップショット。距離感は被写体に合わせて直感で決めるが、なるべく寄るようにしているという。その場その場で対応し、絶え

ず人が動いている池袋の生き生きとした街のエネルギーを伝えたいからだ。

◆はしもと・りえ 1969年生まれ。20代のころからストリートスナップを撮り始める。

薄井一議
Show88／昭和88年

もし昭和が続いたら今年が88年にあたる。

昭和がつくからといって、別段ノスタルジーを追い求めているわけではなく。これはカメラと世界に入り、フリーになつて50年

以上経つた。1992年にカメラ雑誌で始まったこの連載だが、既に鬼籍に入られた先輩の写真家たちもいる。その中からあらためて立したこの地では、苦しいぐらいの生きることへの渴望に満ちあふれている。街は強烈なプラスチックの原色で表現され、視覚によつて奮い立たせられているようにさえ思える。白か黒かでは決められない矛盾が多く渦巻く街、崇高さといかがわしさが共存し、恐怖と滑稽が交錯し、生と死の匂いがある。その表裏一体は、本来あるべき人間らしさのように感じてならない。漂白していく日本に少々臭覚が鈍りながらも、この人間の匂いを追い求めで行きたい。

この作品は大阪・西成・飛田新地・京都・五条楽園・千葉・栄町などを撮影している。現代日本から孤立したこの地では、苦しいぐらいの生きることへの渴望に満ちあふれていた。先輩、後輩、仲間たちである。テレビなどでこの道30年のベテランなどと聞くと、同じことをよくぞやられたものだと感心する。

ふと気がつくと斎藤さんもこの世界に入り、フリーになつて50年ぞやられたものだと感心する。以上経つた。1992年にカメラ雑誌で始まったこの連載だが、既に鬼籍に入られた先輩の写真家たちもいる。その中からあらためて8人に登場してもらった。

ジョセフ・クーデルカ
Chaos 1999-2012

アジア初となるクーデルカの大規模な回顧展が東京で開かれている。ひときわ広い空間を占めるのが「カオス(混沌)」と題されたパノラマ作品を展示するくくりだ。クーデルカは故郷チエコでロマンと行動をともにし、1968年のプラハ侵攻を撮ったのち、定住地を持たない放浪者となつた。その後自分の鏡のような光景を追いなが

齊藤康一の肖像

齊藤康一さんは、これまでに作家や画家や彫刻家、芸能人、経済人、政治家など、数えきれないほどの肖像写真を世に残してきたが、その膨大な作品の中には、数多くの写真家たちの肖像がある。ともに時代を生き、ともに写真を撮り続けた、先輩、後輩、仲間たちである。

テレビなどでこの道30年のベテランなどと聞くと、同じことをよくぞやられたものだと感心する。

2011年、沖縄の写真家・伊志嶺隆の回顧展に呼ばれたことをきっかけに撮り始め、沖縄の歴史に書物で触れた。改めて知識がなかつたことがわかり、自分の言動を考え直すとともにさらに沖縄に心を寄せるようになったという。

太平洋戦争末期、住民を巻き込んで壮絶な戦いを経て、今も問題が山積みされている沖縄。

鷺尾倫夫

巡歷の道オキナワ 2011年、沖縄の写真家・伊志嶺隆の回顧展に呼ばれたことをきっかけに撮り始め、沖縄の歴史に書物で触れた。改めて知識がなかつたことがわかり、自分の言動を考え直すとともにさらに沖縄に心を寄せるようになったという。太平洋戦争末期、住民を巻き込んで壮絶な戦いを経て、今も問題が山積みされている沖縄。

取材前の準備を心がけるのだが、テーマは絞りきれない。撮影は米軍上陸地点の慶良間諸島から始まり、本島は北の本部から南の糸満をじっくりと歩き、地元のおじいおばあから話を聞いた。悲惨な戦争体験を吐き出す生の声に圧倒され、歴史の本とは異なることを実感する。そうした見知らぬ自分への温かい思いやりに触れ、ひかれ切つていて。年に数回の沖縄通いは続く。